

【共同研究】

仮想的有能感と自尊感情はいじめにどのように関係するか —大学生における中学時代の想起による—

今野 義孝* 吉川 延代** 会沢 信彦***

Effects of assumed competence and self-esteem on bullying during junior high school: A retrospective study of college students.

Yoshitaka KONNO, Nobuyo YOSHIKAWA, Nobuhiko AIZAWA

This study examined how self-esteem and assumed competence relate to bullying. Participants were 434 undergraduates (204 males, 230 females). Participants recalled their experiences during junior high school as they completed a self-esteem scale and an assumed competence scale. Results revealed a significant positive correlation between the extent of bullying perpetrated and assumed competence for male participants and participants as a whole. In other words, bullies had a higher assumed competence score. Cluster analysis was performed using the standardized scores from the self-esteem scale and the assumed competence scale. Based on the results, participants were classified into five types: “Atrophy type” “Assumption type” “Self esteem type” “Omnipotent type” and “Average type.” Bullies were often “Assumption type” and victim-bullies were often “Omnipotence type.” In contrast, “Self esteem type” participants experienced less bullying. These results were discussed in terms of self-esteem and assumed competence.

キーワード : bullying, assumed competence, self-esteem
いじめ経験、仮想的有能感、自尊感情

問題と目的

いじめの背景には様々な要因が考えられるが、その1つに自尊感情（self-esteem）の要因が指摘されている。Rosenberg（1965）によれば、自尊感情とは「自己に対する肯定的または否定的な態度」のことである。吉川・今野・会沢（2012, 2013）は、いじめと自尊感情の関係について検討した結果、いじめ被害経験者は被害経験がない者

と比較して自尊感情が有意に低いこと、言語的な暴力の被害経験者や身体的な暴力の被害経験者は、これらの被害経験のない者よりも自尊感情が有意に低いこと、小学校中高学年から高校までの長期にわたるいじめ被害経験者は、経験しなかった者よりも自尊感情が有意に低いことなどを見いだした。一方、自尊感情の低さがいじめ加害と関係することを指摘する研究も少なくない（O'Moore & Kirkham, 2001; Yang et al., 2006; Callaghan & Joseph, 1995; Olweus, 1992）。Rigby & Cox（1996）は、中学生を対象にした調査によって、自尊感情の低い女子がいじめ加害に関与することを指摘している。

従来の研究の多くは、自尊感情の低さといじめ

* この よしたか 文教大学人間科学部

** よしかわ のぶよ 文教大学人間科学部

*** あいざわ のぶひこ 文教大学教育学部

との関係を論じたものが多い。これに対して、速水・木野・高木（2004）や松本・山本・速水（2009）は、仮想的有能感との関係を検討している。仮想的有能感とは、「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価、軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能の感覚」である（速水・木野・高木，2004）。仮想的有能感が高い者は、劣等感からくるストレスを緩和するために「自分より下」と思っている相手にいじめを行なうとされる（小平・小塩・速水，2007）。つまり、仮想的有能感の背景には低い自尊感情や劣等感があり、その過剰補償として自分は有能であるという思い込みを形成しているものと考えられる。

速水（2006）は、有能感のタイプを仮想的有能感尺度と自尊感情尺度との組み合わせによって、「仮想型」「全能型」「自尊型」「委縮型」の4つのタイプに分類した。「仮想型」は、仮想的有能感が高く、自尊感情が低いタイプである。速水（2006）によれば、このタイプの人は、客観的には有能とは認められないにもかかわらず、自分は有能であると思込んでいる。また、自分の失敗の原因を自分以外のせいにしたり、他者を批判したりすることによって自分の有能さを誇示しようとする。「全能型」は、仮想的有能感も自尊感情も高いタイプである。このタイプの人は自分には満足しているが他者には不満を抱いており、他者を軽視する傾向がある。「自尊型」は仮想的有能感が低く、自尊感情が高い。このタイプの人は、自信があっても他者を軽視しないため、社会的に望ましいとされる。「委縮型」は、仮想的有能感も自尊感情も低く、劣等感も強いタイプである。また、他者への不満はないが、自分に対しては不満があっても自信がもてず、失敗などをすべて自分のせいにするという特徴がある。

松本・山本・速水（2009）は、これら4つのタイプといじめとの関連性について検討し、「仮想型」と「全能型」にはいじめ加害経験者といじめ被害経験者が多いことや、「委縮型」と「自尊型」ではいじめ加害経験者やいじめ被害経験者が少ないことなどを報告している。このことから、いじめ加害やいじめ被害には、仮想的有能感の関与が

大きいことが考えられる。

吉川・今野・会沢（2012，2013）は、いじめ被害経験やいじめ加害経験と自尊感情との関係について検討し、いじめ被害経験者やいじめ被害といじめ加害の両方の経験者は自尊感情が低いことを見いだした。この結果は、自尊感情の低さがいじめ被害やいじめ加害をもたらしている可能性を示唆している。しかし、自尊感情の要因に加えて仮想的有能感の要因も重要なことがこれまでの研究によって指摘されている（松本・山本・速水，2009）。そこで、本研究では仮想的有能感と自尊感情が、いじめにどのように関係しているかを検討する。

方 法

1. 調査協力者

調査協力者は、首都圏の私立大学に在籍する学部生434名（男子204名、女子230名）である。質問紙調査は、授業において一斉に行われた。その際、倫理的な配慮として、調査への協力は任意であり協力したくない場合は白紙で提出すること、回答は無記名であること、個人情報保護と守秘義務を遵守すること、得られたデータは研究以外の目的で使用しないことを文書と口頭で伝えた。協力を依頼したすべての学生から回答が得られた。その中から、記入漏れや回答に不備のあった42名を除く392名（男子200名と女子192名）を分析の対象とした。

回答に当たっては、いじめは中学時代に最も頻繁に生じること（吉川・今野・会沢，2012，2013）や、仮想的有能感は中学生の頃に最も顕著になること（木野・速水・高木，2004）から、調査協力者には中学時代を思い出して、その当時の自尊感情と仮想的有能感について回答することを求めた。いじめの回答に関しても中学時代に限定した。

2. 質問紙

質問紙には、仮想的有能感尺度（速水・木野・高木，2004）、自尊感情尺度（山本・松井・山成，1982）、いじめ被害経験尺度といじめ加害経験尺

度（山本，2007）を用いた。

仮想的有能感尺度は、「自分の周りには気のきかない人が多い」「知識や教養がなくても偉そうにしている人が多い」「今の日本を動かしている人の多くは、大した人間ではない」などの11項目から成る。それぞれの項目は、「全く思わない（1点）」「あまり思わない（2点）」「どちらともいえない（3点）」「ときどき思う（4点）」「よく思う（5点）」の5段階で評価した。

自尊感情尺度は、「私はすべての点で自分に満足している」「私にはあまり得意と思うところがない」「私は自分に対して前向きな態度をとっている」などの10項目である。それぞれの項目は、「全く思わない（1点）」「あまり思わない（2点）」「どちらともいえない（3点）」「ときどき思う（4点）」「よく思う（5点）」の5段階で評価した。

いじめ被害経験尺度といじめ加害経験尺度は、いじめの頻度や様態を調べるものである。被害経験尺度と加害経験尺度はそれぞれ11項目から成り、同じ内容を受動態の文章と能動態の文章で表したものである（「けんかをうられた」「けんかをうった」、「したくないことをむりやりやらされた」「したくないことをむりやりやらせた」など）。評価は、「全くない（1点）」「2～3回あった（2点）」「頻繁にあった（3点）」の3段階で行われた。本研究では、被害経験尺度と加害経験尺度のそれぞれ11項目の得点を掛け合わせた値をいじめ被害の程度、およびいじめ加害の程度とした。

結 果

1. いじめ経験の種類と仮想的有能感および自尊感情の比較

本研究では、いじめ経験の種類を、「被害経験（被害）」群（ $N=32$ 、8.1%）、「加害経験（加害）」群（ $N=16$ 、4.1%）、「加害経験と被害経験の両方（加害・被害）」群（ $N=77$ 、19.6%）、「傍観経験（傍観）」群（ $N=180$ 、45.9%）、「経験無し（無し）」群（ $N=87$ 、22.2%）に分けた。

仮想的有能感尺度の得点は、Figure 1に示すように、「加害」群が最も高く、次いで「加害・被害」

群、「被害」群、「傍観」群、「無し」群の順であった。一元配置分散分析の結果、群間に有意差が見られた（ $F(4, 534) = 4.53$, $p < .001$ ）。Bonferroniによる多重比較の結果、「加害」群と「無し」群の間、および「加害・被害」群と「無し」群との間に、それぞれ5%水準で有意差が見られた。

自尊感情尺度の得点は、Figure 2のように「加害」群が最も高く、次に「加害・被害」群、「被害」群、「傍観」群、「無し」群の順となった。一元配置分散分析の結果、群間に有意差が見られた（ $F(4, 387) = 4.232$, $p < .001$ ）。Bonferroniによる多重比較の結果、「加害・被害」群と「無し」群との間と、「傍観」群と「無し」群との間に、それぞれ5%有意差が見られた。

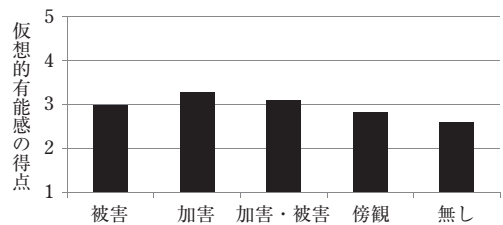


Figure 1 いじめの種類による仮想的有能感尺度得点の比較

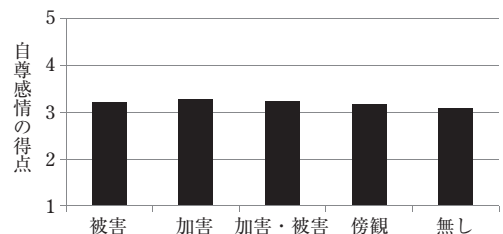


Figure 2 いじめの種類による自尊感情尺度得点の比較

2. 仮想的有能感と自尊感情の男女間比較

Figure 3は、仮想的有能感と自尊感情の男女間比較を示したものである。t検定の結果、仮想的有能感は、男子の方が女子に比べて有意に高かった（ $t(390) = 2.559$, $p < .05$ ）。一方、自尊感情については、男女間に有意差はなかった（ $t(390) = 1.388$, $p > .1$ ）。

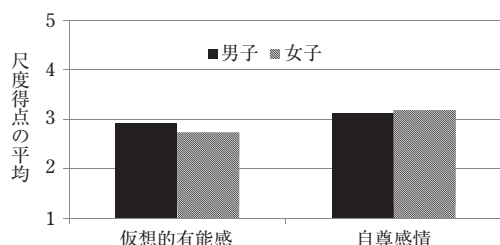


Figure. 3 仮想的有能感尺度得点と自尊感情尺度得点の男女比較

3. いじめの程度と仮想的有能感および自尊感情との関係

いじめ被害の程度、いじめ加害の程度、仮想的有能感、および自尊感情の相関関係をPearsonの相関係数によって検討した。相関係数は、協力者全体、男子、女子について算出した (Table 1)。

その結果、仮想的有能感と自尊感情との間に有意な正の相関が見られた (全体 $r=.273$ 、男子 $r=.279$ 、女子 $r=.301$)。いじめ被害の程度といじめ加害の程度との間には全体と男子において有意な正の相関が見られた (全体 $r=.540$ 、男子 $r=.483$)。

仮想的有能感といじめ加害の程度との間には、全体と男子において有意な相関が見られた (全体 $r=.272$ 、男子 $r=.353$)。いじめ被害の程度と仮想的有能感の間には相関は見られなかった。自尊感情といじめ被害の程度との間と、自尊感情といじめ加害の程度との間にも有意な相関は見ら

れなかった。

4. いじめの程度に対する仮想的有能感と自尊感情の影響

いじめ被害の程度といじめ加害の程度に対する仮想的有能感と自尊感情の影響について、強制投入法による重回帰分析を用いて検討した。その結果、Figure 4に示すように、全体と男子において、いじめ加害の程度に対する仮想的有能感に有意な β が見られた (全体 $\beta=.252$ 、男子 $\beta=.323$)。一方、自尊感情については、いじめ被害の程度に対して有意な負の β が見られた (全体 $\beta=-.125$ 、男子 $\beta=-.371$ 、女子 $\beta=-.164$)。

5. クラスタ分析

仮想的有能感尺度得点と自尊感情尺度得点をz変換し、大規模クラスタ分析を行った。その結果、調査協力者はFigure 5に示す5つのクラスタに分類された。それぞれのクラスタは、「萎縮型」「仮想型」「自尊型」「全能型」「平均型」と命名された。

それぞれの特徴は、以下の通りである。「萎縮型」(N=72、18.4%)は、仮想的有能感も自尊感情もともに低い。「仮想型」(N=32、8.2%)は、仮想的有能感が高く、自尊感情が低い。「自尊型」(N=91、23.3%)は、自尊感情が高く、仮想的有能感が低い。「全能型」(N=92、23.5%)は、仮想

Table 1 仮想的有能感、自尊感情、被害程度、加害程度の相関関係

相関係数		仮想的有能感			自尊感情			被害程度			加害程度		
		全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子
仮想的有能感	全体												
	男子												
	女子												
自尊感情	全体	.273**											
	男子		.279**										
	女子			.301**									
被害程度	全体	-.007			-.012								
	男子		.029			-.343							
	女子			-.006			-.154						
加害程度	全体	.272**			.143			.540**					
	男子		.353*			.202			.483*				
	女子			-.031			-.150			-.051			

* $p<.005$; ** $p<.001$ (全体 N=392, 男子 N=200, 女子 N=192)

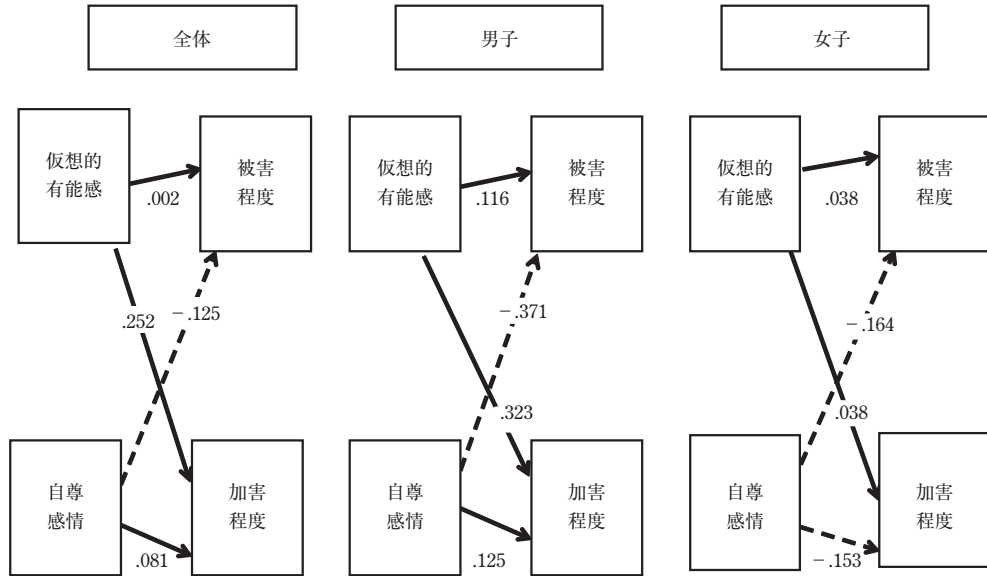


Figure 4 いじめ被害の程度といじめ加害の程度に対する仮想的有能感と自尊感情の影響

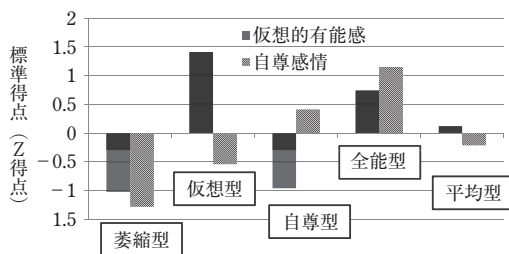


Figure 5 仮想的有能感と自尊感情によるクラスター分析

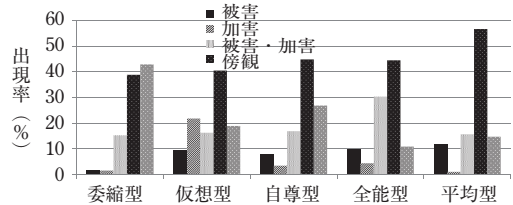


Figure 6 いじめの種類のクラスター間比較

的有能感も自尊感情ともに高い。「平均型」(N = 104, 26.6%) は、仮想的有能感も自尊感情も平均的である。

クラスターの人数は、「平均型」が最も多く、次に「自尊型」と「全能型」がほぼ同じであった。その後に「萎縮型」が続いており、「仮想型」は全体の1割に達しなかった。

6. いじめの種類のクラスター間比較

いじめの種類(「被害」「加害」「加害・被害」「傍観」「無し」とクラスター(「萎縮型」「仮想型」「自尊型」「全能型」「平均型」との関係についてクロス集計を用いて分析した。その結果、Table 2とFigure 6に示すように、クラスターといじめの種類との間に有意な関連が見られた($\chi^2 =$

44.993, $df = 16$, $p < .001$)。

さらに調整済残差分析の結果、「萎縮型」には被害経験者が少なく、いじめ経験無しの者が多いこと、「仮想型」には加害経験者が多いこと、「自尊型」には全般的にいじめ経験者が少ないこと、「全能型」には加害・被害経験者が多いこと、「平均型」には傍観者が多く、いじめ経験無しの者が少ないこと、などの特徴が見られた。

考 察

本研究では、仮想的有能感と自尊感情は、いじめ加害経験者や、いじめ加害といじめ被害の両方の経験者がその他のいじめの経験者に比べて高いことが見いだされた。この結果は、自尊感情の低

Table 2 いじめの種類とクラスターとの関係

		委縮型	仮想型	自尊型	全能型	平均型
被害 (N=32)	度数	1	3	7	9	12
	%	1.4	9.4	7.8	9.8	11.7
	調整済み残差	-2.3	.3	-.2	.6	1.5
加害 (N=16)	度数	1	8	3	4	1
	%	1.4	21.6	3.3	4.3	.9
	調整済み残差	-.9	2.3	.1	.8	-1.5
加害・被害 (N=77)	度数	11	6	15	28	16
	%	15.2	16.2	16.8	30.4	15.6
	調整済み残差	-1.0	-.1	-.9	3.0	-1.0
傍観 (N=180)	度数	28	13	40	41	58
	%	38.9	40.6	44.9	44.5	56.8
	調整済み残差	-1.4	-.7	-.1	-.4	2.2
無し (N=87)	度数	30	7	24	10	15
	%	43.0	18.9	26.9	10.8	14.7
	調整済み残差	4.6	-.1	1.0	-3.1	-2.0
	度数	72	37	89	92	102

さがいじめ被害やいじめ加害と関係しているという報告（吉川・今野・会沢, 2012, 2013）と一見矛盾するように思われる。しかし、相関分析と重回帰分析によって検討した結果、仮想的有能感といじめ加害の程度との間に正の相関が見られ、男子では仮想的有能感がいじめ加害の程度を強める要因となっていた。一方、自尊感情は全体的にいじめ被害の程度を弱める働きをしていた。特に、女子においては、いじめ被害の程度の緩和に加えて、いじめ加害の程度の緩和要因としても機能していた。さらに、有能感スタイルとの関連で見ると、高い仮想的有能感と低い自尊感情を特徴とする「仮想型」にいじめ加害経験者が最も多いことから、自尊感情の低さといじめ加害との関連があらためて裏付けられたといえることができる。

本研究では、いじめの種類と有能感のタイプの関係をクロス集計と残差分析によって検討した。その結果、①「委縮型」には被害経験者は少なくいじめ経験無しの者が多い、②「仮想型」には加害経験者が多い、③「自尊型」には全般的にいじめ経験者が少ない、④「全能型」には加害・被害経験者が多い、⑤「平均型」には傍観者が多くいじめ経験無しの者が少ない、などの特徴が見られた。この結果は、仮想的有能感が高い「仮想型」と「全能型」ではいじめ加害経験といじめ被害経験が有意に多く、反対に仮想的有能感が低い「自

尊型」と「委縮型」ではいじめ加害経験といじめ被害経験が有意に少ないという速水・木野・高木（2004）の指摘と一致しており、仮想的有能感がいじめと強く関係することが追認された。

鈴木（2010）は、他者軽視傾向と遊戯性の観点から「全能型」の特徴について検討している。それによると、他者軽視傾向は遊戯性と正の相関があり、「全能型」の生徒は他者軽視傾向も遊戯性もともに高いことや、外向性が高く大勢に囲まれて賑やかに過ごしたり、リーダー的な存在になったりする機会も多いことなどを挙げている。しかしその一方で、「全能型」には、他の有能感タイプよりも過去半年間のいじめ被害の生徒が多いことも報告されている（山本, 2007）。その理由として、速水（2006）は、「全能型」は相手に攻撃をしかけやすいが、その行動が周囲の支持を得られなければ、逆にいじめの被害者になってしまう可能性を指摘している。

本研究では、「仮想型」にはいじめ加害者が多いという結果が見られた。これに対して、山本（2007）は、高校生を対象にした調査から「仮想型」の生徒には過去半年間のいじめ被害が多いことを指摘し、その理由として「仮想型」の生徒は自尊感情が低いのに仮想的有能感が高いというアンバランスが周囲に見えてしまうことを挙げている。しかしその一方、「仮想型」は「怒りの沈殿」

が何らかのストレスによって解放されることで、いじめ被害やキレなどの問題行動につながる可能性があることが指摘されており（速水, 2011）、このことがいじめ加害と関係するものと考えられる。

岡安・高山（2000）や吉川・今野・会沢（2012）は、ストレスといじめとの関係について調査し、いじめ被害者だけでなくいじめ加害者も高いストレス状態にあり、いじめ加害にはストレス緩和の目的があることを示唆している。速水・木野・高木（2004）は、「仮想型」の生徒は学業や友人関係の不安などを抱きやすい傾向があることを指摘し、こうしたストレスを緩和するためにいじめを行っていると推測している。また、いじめ加害者には、恨みや猜疑心といった他者への敵意行動に加えて、協調性の低さや劣等感の強さ、共感性の低さなどの特徴を指摘する研究もある（本間, 2003）。こうした特徴は仮想的有能感の高い者にも見られ、仮想的有能感が高い人は、共感性や協調性が低く他者との関係性をうまく築くことができないため対人的なストレスを感じやすく、そのことがいじめにつながっていることも考えられる。また、「仮想型」の人は、日頃から感情的に不安定で、強い抑うつ感情や敵意感情を抱えていることや、所属欲求が高いにもかかわらず非受容感や被拒絶感が高いこと、見捨てられ不安が高く、他者から受容される自信がなく、自ら他者と親密に交わることを回避するような愛着スタイルがいじめ被害やいじめ加害につながっている可能性も考えられる（速水, 2011）。

本研究では速水・木野・高木（2004）のタイプに加えて、仮想的有能感も自尊感情も平均的な特徴を持つ「平均型」を抽出することができた。「平均型」は全体の4分の1以上を占めており、「傍観」者が多くの割合を占めていた。森田・清永（1994）は、いじめの温床として傍観者の存在を指摘している。このことから、「平均型」は傍観者としていじめに関与している可能性が考えられる。

速水・木野・高木（2005）は、仮想的有能感と怒りの関係について論じ、仮想的有能感が高いほど怒りを表出しやすいこと、仮想的有能感が低い場合でも自尊感情が低いほど怒りが表出されやす

いこと、仮想的有能感が低く自尊感情が高い場合に怒りの表出が少ないこと、仮想的有能感が高いほど怒りを内に溜める傾向があること、などを指摘している。したがって、怒りの制御が困難な者に対しては、仮想的有能感の背後にある他者軽視・他者批判的な認知傾向を修正すると同時に、自尊感情を高めるような働きかけをすることがいじめの予防や改善に有効であると考えられる。

本研究の限界と今後の課題

本研究では、仮想的有能感と自尊感情との間に正の弱い相関が見られた。この結果は、両者の間に無相関を指摘した従来の研究と異なる。しかし、小塩・西野・速水（2009）によると、仮想的有能感と顕在的自尊感情との間には有意な関連がないが、潜在的自尊感情との間には有意な正の相関があることが指摘されている。つまり、仮想的有能感という概念には、自己に対するポジティブな態度が潜在しており、特に顕在的自尊感情が低い場合には、潜在的自尊感情が仮想的有能感を強化すると考えられる。また、熊谷・杉山（2007）は、大学生において、仮想的有能感は自尊感情に正の影響を及ぼすことを見だしている。これらの知見を考慮すると、本研究で見いだされた仮想的有能感と自尊感情との間の正の相関には、潜在的なレベルの自尊感情の影響が関係している可能性も考えられる。この点については、今後の検討課題である。

本研究では、従来の研究結果と異なり、「仮想型」は全体の8.2%に過ぎなかった。木野・速水・高木（2004）によれば、中学生は仮想的有能感が高く、年齢とともに「自尊型」の割合が高くなるとされている。本研究において「仮想型」の割合が少なかった理由は現時点では明らかでない。しかし、本研究では中学生時代を思い出して仮想的有能感と自尊感情を評価するという適及的な方法を用いており、そのため当時の仮想的有能感と自尊感情を正確に測定していたかどうかという問題が残る。今後は実際に、中学生や高校生を対象にした調査研究が必要である。

参考文献

- Callaghan, S., & Joseph, S. (1995). Self-concept and peer victimization among schoolchildren. *Personality and Individual Differences*, 18, 161-163.
- 速水俊彦・木野和代・高木邦子 (2004). 仮想的有能感の構成概念の妥当性 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学専攻), 51, 1-8.
- 速水俊彦・木野和代・高木邦子 (2005). 他者軽視に基づく仮想的有能感—自尊感情との比較から— 感情心理学研究, 12(2), 43-55.
- 速水俊彦 (2006). 他人を見下す若者たち 講談社新書.
- 速水俊彦 (2011). 仮想的有能感研究の展望 教育心理学年報, 50, 176-186.
- 本間知己 (2003). 中学生におけるいじめの停止に関連する要因といじめ加害者への対応 教育心理学研究, 51, 390-400.
- 木野和代・速水俊彦・高木邦子 (2004). 仮想的有能感の発達の变化—横断的データを用いた検討— 日本教育心理学会第46回総会論文集, 34.
- 熊谷 隼・杉山憲司 (2007). いじめ・いじめられ経験と仮想的有能感・自尊感情の関連性 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, 16, 116-117.
- 小平英志・小塩真司・速水俊彦 (2007). 仮想的有能感と日常の対人関係によって生起する感情経験—抑鬱感情と敵意感情のレベルと変動性に注目して— パーソナリティ研究, 15, 217-227.
- 松田君彦・宮下洋平 (2010). 仮想的有能感に関する研究 (1) 鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編, 61, 103-110.
- 松本麻友子・山本将士・速水俊彦 (2009). 高校生における仮想的有能感といじめとの関連 教育心理学研究, 57, 432-441.
- 森田洋司・清永賢二 (1994). 新訂版いじめ—教室の病 金子書房.
- 岡安孝弘・高山 巖 (2000). 中学校におけるいじめ被害者および加害者の心理的ストレス 教育心理学研究, 48, 410-421.
- Olweus, D. (1992). Victimization by peers: Antecedents and long-term outcomes. In K. H. Rubin & J. B. Asendorpf (Eds.), *Social withdrawal, inhibition and shyness in childhood* (pp. 315-341). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- O'Moore, M., & Kirkham, C. (2001). Self-esteem and its relationship to bullying behaviour. *Aggressive Behavior*, 27(4), 269-283.
- 小塩真司 (1998). 成年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280-290.
- 小塩真司・西野拓朗・速水俊彦 (2009). 潜在的・顕在的自尊感情と仮想的有能感との関連 パーソナリティ研究, 17, 250-260.
- Rigby, K., & Cox, I. (1996). The contribution of bullying at school and low self-esteem to acts of delinquency among Australian teenagers. *Personality and Individual Differences*, 21(4), 609-612.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and adolescent self-image*. Princeton Univ. Press.
- 鈴木有美 (2010). 『他人を見下す若者たち』の性格特徴—仮想的有能感と5因子性格検査の関連— 瀬木学園紀要, 4, 66-71.
- 山本将士 (2007). 仮想的有能感からみた高校生のいじめ 名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究, 8, 191-205.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.
- Yang, S. J., Kim, J. M., Kim, S. W., Shin, I. S., Yoon, J. S. (2006). Bullying and victimization behaviors in boys and girls at South Korean primary schools. *Journal of the American Academy of Child & Adolescent Psychiatry*, 45(1), 69-77.
- 吉川延代・今野義孝・会沢信彦 (2012). いじめの被害—加害経験と自尊感情との関係—大学生を対象とした週及的調査研究— 文教大学人間科学部紀要人間科学研究, 34, 169-182.

吉川延代・今野義孝・会沢信彦（2013）. 大学生
における過去のいじめ経験に関する質問紙調査
—いじめ経験といじめの捉え方、および自尊心

情との関係— 文教大学人間科学部紀要人間科
学研究, 35, 155-166.

[抄録]

本研究では、仮想的有能感と自尊感情が、いじめにどのように関係しているのかを検討した。調査協力者は、学部生434名（男子204名、女子230）である。回答に当たっては、中学時代を思い出して、その当時のいじめについてと、その当時の自尊感情と仮想的有能感について答えた。いじめ被害の程度、いじめ加害の程度、仮想的有能感、および自尊感情の相関関係を検討した結果、いじめ被害の程度といじめ加害の程度との間には、全体と男子において有意な正の相関が見られた。仮想的有能感といじめ加害の程度との間には、全体と男子において有意な相関が見られた。仮想的有能感尺度得点と自尊感情尺度得点を用いて大規模クラスター分析を行った結果、調査協力者は「委縮型」「仮想型」「自尊型」「全能型」「平均型」に分類された。「仮想型」には加害経験者が多いこと、「全能型」には加害・被害経験者が多いこと、「自尊型」にはいじめ経験者が少ないこと、「平均型」には傍観者が多いことなどが見られた。これらの結果は、仮想的有能感と自尊感情との関連において考察された。
